HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〈事件〉として見た『煤烟』 : 理解可能及び不能という表象（前）
Author(s)	田代, 早矢人
Citation	国語国文研究, 117, 47-56
Issue Date	2000-12-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94656
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_117_47-56.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

〈事件〉として見た『煤烟』
——理解可能及び不能という表象——（前）

田代早矢人

一

特定の人物をモデルにして小説を書くという行為の問題点は何か。決して新しくはないものの、未だに無くならないこの手の議論は次のような点を見落としている。それは「文学」なるものが、いついかなるときも同じように機能しているわけではないこと、書かれた小説がいかなるときも同様の意味、力を発揮するものではないこと、それぞれの小説と接する諸テクストがその時々違うこと、したがって、こうした「文学」の普遍性を前提とした問題の立て方は一義的には不可能であること、またその当然の帰結として、書くという行為を行った作者とモデルの関係だけに問題を回収できないことなどである。

今回取り上げる『煤烟』も周知のとおり、いわゆるモデル小説なのだが、小説連載開始以前に森田米松と平塚明子の情死未遂事件報道、予告などの記事が公表されており、連載終了後も批評や当事者の回想の発表、単行本『煤煙』の刊行などがなされ、様々なテクストと隣接している。こうした『煤烟』を他と同じように論ずることはできないし、どの時点で『煤烟』（または『煤煙』）を論ずるかによってその内容はおのずと変わってくるはずだ。またそのように、隣接するテクストによって意味や力が異なる以上、問題は作者森田草平がモデル平塚明子を如何に書いたかということでもない。むしろ、そのように今ある現状から小説を通して、過去に実際にあった現実を問題にすること自体が『煤烟』に隣接するテクストとの関係において可能になるのだ。ならば、『煤烟』を問題にするには時間、空間の限定から始めなければならない。初出『煤烟』（『東京朝日新聞』明治四十二年一月一日～五月一六日）と単行本『煤煙』の間には最大で三年半の時間の開きがあり、内容面でも加筆、修正されたことは当時から知られていた。[1] その間には『青踏』の発刊などもあり、同一のテクストとは一概には言い難い。また、同じ初出であっ

ても、批評が出た後と前ではテクストの意味や力は変化する。同じテクストであっても、ある特定の時点に限定した〈事件〉としてしか論じることができない問題があまりにも多いのだ。

本稿が初出『煤烟』を底本として取り上げるのも、単行本との異同を問題にして、閉じた体系としての『煤烟』の性質の変化を問題にするためではない。初出『煤烟』の最終回までに時間を限定することで、隣接するテクストを制限し、『煤烟』自体を〈事件〉として見ることが目的なのである。そしてその場合にモデルに対して、『煤烟』がそれに隣接するテクスト——例えば、情死未遂事件を大々的に報じた『東京朝日新聞』や、平塚明子の失踪から数えて六日間連続して事件に関わる記事を掲載した『万朝報』など——との相補的関係において何をなすのか、また、どのようなことが読まれてしまう可能性があるのかを検討していく。

二

『煤烟』は基本的には小島要吉による出来事の解釈が繰り返し行われている小説であるということができる。また語り手は多くの場合要吉に内的焦点化しているために、要吉の解釈を語り手が訂正したり、情報を添加したりすることはほとんどない。解釈を示す際の特徴としては、ポール・ヴェーヌが『歴史をどう書くか』の中でいうところの「遡及話法」が繰り返し用いられていることが挙げられる。[2] つまり、「或るひとつの出来事が既に起こってしまった。この出来事に関してただし説明とはなんであろうか」という問題を立てた上で法則を用いて「因果にかかわる説明」が用いられているのだ。その際要吉の出自を語るいわゆる前半（一の一～五の五）においては故郷に帰ってきた時点における要吉が、真鍋朋子を説明するいわゆる後半（六の一以降）においては朋子それ自体が〈既に起こってしまった出来事〉の位置に置かれることになる。前半部においては、要吉の現状をどのように説明すればよいのか、後半部においては朋子の現状をどのように説明すればよいのか、という問題を立ててその原因を探していくことが繰り返されているのだ。その意味では『煤煙』において要吉による「誤読」の反復が前半後半を通して繰り返されているという飯田祐子の指摘は正しい。[3] たしかに、要吉による出来事の解釈は一貫して「対象の具体性を無視した誤読」であり、そこでは「対象は主体の『読む』快楽にひたすら奉仕するものとなっている」のである。

しかし、プロットに即してみると、前半部の「誤読」の対象、すなわち要吉が解釈する際の対象が原因となる出来事であるのに対し、後半部ではその対象は結果としての朋子であるという相違点が見られる。前半部では原因となる出来事がまず提示されるが、後半部では結果となる出来事が始めに提示されるのだ。因果関係を示す順序が異なるのである。飯田の論ではこうした「誤読」の具体的な様態の違いが検討が行われず、その分析自体が対象の具体性を無視するという結果に陥ってしまっている。その弊に陥らないためにも『煤烟』のなかの解釈の具体的様態に注目し、その中の差異が何を生み出しているのかを検討する必要があるだろう。

小島要吉は三年振りで故郷の停車場（ステイション）に立つた。今頃こんな詫しい心持で、故郷の土を踏まうとは夢にも思つて居なかつた。一昨年（をととし）後一箇年分の学資を拵へる為に帰つた切りで、去年大学を卒業した時も、帰省して見やうなぞと云ふこゝろは起らなかつた。（略）自分だけは生れた国と絶縁した位に思つて居た。それが今度止むを得ない事が生じて、突然帰つて来て、早くも聞慣れた土音を耳にし、見慣れた風俗を眼にすると、幾許（いくら）永く他国に放浪して、他所（よそ）の人間に成済したつもりで居ても、自分は矢張此処の土と水とで出来てると云ふ感じが俄に強く成つた。（一の一）

『煤烟』の冒頭部、小島要吉が東京から故郷の岐阜に帰って来る場面の一節である。「今頃」、「一昨年」などとある点から、ここでは語り手は物語内容における今現在の要吉の位置から語っていることになろう。語り手は要吉の心情に添い、「遡及話法」によって要吉とともに現在の要吉を形成した故郷の言葉、風俗、自然環境を発見する。このような故郷の諸要素を仮に風土と名付けておこう。その場合、現在発見した風土を要吉は要吉自身に先行して存在するものとして把握していることになる。後述するように、ここでは要吉の現状がどのような状態なのかは不明瞭なのだが、故郷は風土を媒介とすることで要吉にとっての過去としても位置付けられ、過去と現在が〈原因――結果〉という関係で結ばれる。こうした話法が『煤烟』では以降も執拗に反復されるのだ。前半部では故郷や家族が要吉の現状の原因として解釈され、それにより自己の現状を結果として位置付ける。その際の要吉の解釈の様態を確認するのが当面の目的なのだが、その前に、まず故郷や家族が原因としてどのように切り出されるのかを検討しておこう。それは解釈する要吉やそれを語る語り手と、原因として解釈される故郷や家族との階層性を明らかにすることでもあり、その階層性を保証する解釈装置をも明らかにしていくことでもあるからだ。

要吉にとって故郷は自身の現状を確認させてくれる原因でもあるが、同時に東京という「他所」を対立項として自己の同一性を確認させてくれる場所でもある。その一方で、要吉にとっての故郷は必ずしも自身を同一化させることのできない場所でもあるのだ。要吉と故郷との間には明確な一線が引かれているともいえる。前半部において一人要吉だけが故郷の「聞き慣れた土音」を発しないこともその一例で、要吉の言葉はいわゆる標準語であり故郷のそれではない。故郷とは一面では要吉にとって東京と同様に「他所」であるわけだ。では故郷という「他所」は要吉の中でどのように形成されているのか、また、故郷という「他所」によって要吉はどのような現状を説明しうるのか。

要吉は故郷の村において禁を犯した家の子孫としてしるし付けられた存在として描かれている。要吉の生まれ育った村には土俗道三（斎藤道三）の首塚があり、首塚があるとされる薮には道三の執念が残っていると信じられている。「村の百姓」の間には「若し過まつて足を踏み入れた者があれば、直（すぐ）に怖ろしい祟りがある」との言い伝えがあるにもかかわらず、祟りがあるという道三松を切ってしまっ

た要吉の祖父は盲目になり、高熱が続いた後、三十一歳で死ぬ。その子、すなわち要吉の父も「人の忌む脱疽といふ病」を「永年煩つて、終ひには一間に閉ぢ籠つたまゝ、見るもみじめな最期を遂げ」る（三の一～三）。

この故郷の村という言い伝えが信じられている場所では祖父が盲目になって死んだことや父が脱疽にかかったことは祟りとして解釈されている。言い伝えという故郷の内部で継承される言説において、要吉は祟られた家の子として一方的に意味付けられるのだ。それは家の者も同様で、父は「其身限で小島の家の血統が絶えるものと思つて居た」（三の四）のであり、生まれてくることを望まれていなかった、しるしを有する要吉は祟りが退くことを願う祖母に連れられ毎月道三の墓に詣でるようになる。

しかし、前述したように、故郷と必ずしも同一化できない要吉は、言い伝えを故郷の者と同様に解釈していくわけではない。先に「内部」と述べたが、故郷が内部であり得るには、その外部を設定したうえで、そうではない場所として位置付けられる必要があるだろう。そこで、次に故郷を一面で「他所」として見ることのできる、要吉による外部からの解釈を検討することにしよう。

旧記によれば、道三は俗名を齋藤庄九郎といふ。京都の油売で其性獰悪、美濃に来つて国司土岐氏に客寓して居る間、欺罔つて其一門を鏖しにして、此国を横領した。（略）弘治丙寅二年四月歿す、生年六十三歳とある。其後首は河原に捨てられたが、近臣それを拾つて此所に埋めたといふ。村の百姓は固りこれだけの事をも知らない。（三の一）

右は先の言い伝えの紹介の直前の一節である。言い伝えと歴史資料との並立により、「村の百姓」の間の言い伝えは歴史資料と比較可能な性質を帯び、結果言い伝えの相対化が可能になるといえよう。この相対化は「村の百姓」が知らない情報によってなされているがゆえに歴史資料を読める要吉と、言い伝えが信じられている場所との間が区分けされることになる。「大学を卒業」し、学問という後ろ盾を有する要吉は村や家という言い伝えが信じられている場所を再解釈できる特権的な立場にあり、その立場から父の忌むべき病と要吉の関係は「良長じては、そんな家の祟りと云ふやうなものに対する恐怖の念は薄らいだが其代り疾病の遺伝が有りはせぬかと云ふことが気にかゝり出した」（三の三）というように祟りから病を切り離す一般性を有する学問的な解釈である遺伝へと組み換えられるのだ。

言い伝えからは外部の学問的な解釈コードによってより一般的な出来事が切り出されていく。その場合、祟りや言い伝えはその有効性よりも、故郷という特定の空間でのみ、要吉をしるしづけることのできるものであって、祟りそのものではなく、それが信じられていること自体が要吉を拘束する。祟りや言い伝えの相対化によって、「村の百姓」や祖父母が祟りを信じていたということ自体が、有効性とは切り離された出来事としてあらわされる。要吉の関心は自身が祟られていることではなく、祟りが信じられている家族という空間で、自身が生まれるべきではなかった子としてしるしづけられてい

ることにあるのだ。これが「地雷火の洗礼を受けて、身体が跡方もなく粉砕されると云ふことが、心を惹いた」（三の四）という要吉の陸軍志望の動機と関係づけられ因果関係を形成するのである。その一方で、同様に祟りから切り離された、父が遺伝の恐れのある病を患っていたという出来事はそのような因果律による要吉の現況との関係づけへとつながることはない。「遡及話法」を用いるならば父の病は要吉の現状を説明するために遺伝という法則を用いて発見されることになるはずだ。ところが、『煤烟』では原則として、要吉を病として表象することは避けられているために〈父＝病（原因）→要吉＝病（結果）〉という関係が成立しない。

もちろん、だからといって「遡及話法」が用いられていないわけではない。父と要吉との間の因果関係の不在は繰り返される「遡及話法」による自身の説明には不可欠な要素なのだ。父と要吉との間の因果関係の不在は同時に他の因果関係を設定することを可能にするのである。

伯父様といふのは、名古屋から出る七宝焼の図案を渡世にして居たのであるが旧時代の職人で、新しい意匠の持合もなく、左様でなくとも余り歓迎されぬ所へ、手が利かなく成つては今後（これから）如何することだらう。あれでも絵を画く人の端くれかと思ふと、要吉は何だか才なくして芸術に依頼する者の末路を見るやうな心持がして、如何やら我身につまされた。それと共に、日頃成るべく避けて考へまいとしてる或事を想ひ出さずには居られなかつた。それは自分が或は此身を持崩した老画工の子かも知れないといふ疑懼（うたがひ）である。（二の三）

要吉は伯父の姿を見て、文学を志す自分の末路に対する不安を感じる。伯父は要吉と同様に「才なくして芸術に依頼する者」だからだ。そして伯父の姿と自身を重ねることは必然的に要吉が伯父の「子かも知れない」という疑惑を思い出させる。ここでの要吉の思考の順序に沿えば、伯父の姿を見た後に自分自身との類似点を発見するということになる。そしてその類似に「血」という法則を与えることで伯父の姿は将来の要吉自身と重なる。自身の将来をも閉ざすような深刻さが付与されていくことになるわけだ。

しかし、伯父と要吉とを「才なくして芸術に依頼する者」として並立してしまう要吉の思考と、その思考に添う語りには注意を要する。「七宝焼の図案を渡世」にする「職人」と文学を志す青年を「芸術」という言葉で結ぶこと自体が問題なのだ。引用部分は文学を志す要吉自身を「芸術家」として位置付ける機能を果たす箇所といえるが、問題なのはこうした「芸術家」の側からすれば「職人」それもわざわざ「旧時代の」と形容している「職人」は〈芸術ならざるもの〉として位置付けられるべきであったという点である。[4] したがって、両者の因果関係は決して自明なものではなく、「芸術家」の側からすれば両者はむしろ矛盾しあうものとして存在することになるのだ。

ところが、ここでは矛盾するべき「旧時代の職人」と文学とが共に「芸術」として併置されている。この点に注目するとこの一節、特に「職人」である伯父と文学を志す要吉とを類似したものと捉え、

そこに「血」という法則を与えるという先の思考の順序は奇妙ささえ帯びてくるだろう。両者の因果関係は要吉によって作為的に結ばれたものと考えねばならない。要吉が文学を志す「芸術に依頼する者」であるという〈既に起こってしまった出来事〉を説明可能にすることこそがここでは求められている。そしてその原因として伯父（＝職人）が「血」という法則を用いて見いだされているのだ。したがって、ここでは文学＝芸術を志す要吉の現状、およびその将来を決定する要吉自身では変更不可能な要因を定めようという目的が最初にあるのだと考えられるだろう。伯父が「職人」であるという出来事（＝原因）自体がそうした目的によって発見されたものなのだ。

このように、『煤煙』の前半部では要吉のおかれた現状を説明するために風土や「血」等、自身では変更不可能な法則を用いて故郷や家族を解釈する。しかもそれは「内部」の解釈と対照しうる、学問的な背景を有する一般性を帯びた外部からの解釈だ。この解釈によって現在と関係づけられるもう一方の出来事は事後的に切り出されたものにすぎない。にもかかわらず、「遡及話法」によって出来事は要吉の現在を決定する要因として先験的に存在するかのように語られていく。しかも、この発見された出来事は要吉の現状を確認するという文脈の中で新たな出来事を生むという連鎖をおこす。父との因果関係の不在は伯父との血のつながりへの不安、すなわち伯父との因果関係の存在と繋がり、伯父との因果関係の存在は実母が二人の男と関係を持っていたことを疑うことへと繋がるのである。

そして、その実母と伯父との関係は「同じ血が脈管を通（かよ）つて、同じ罪の芽が身体（からだ）に宿つて居る」、「過去の自分は其罪が造つたのだ。将来の自分も矢張左様成行くのを免れないかも知れぬ」（四の四）というように「血」という法則によって現在の要吉との因果として説明される。したがって、ここでの母の姿は隅江という妻がありながら、お種とも通じている要吉、そして既に朋子の容貌に惹かれている現在の要吉の姿の説明原理になるものである。しかも、そこで用いる解釈が故郷という「他所」を対象化する外部からの一般性を持つ解釈であるために、将来にわたり要吉の姿を要吉の思考を離れて説明しうる繰り返し可能なものとなっているといえよう。前半部において確認される要吉の現状はそのまま要吉の将来をも説明しうるものなのだ。したがって母の姿は「血」という法則によって、妻の他にお種とも通じ、朋子にも惹かれているという現状のみならず、再上京後の朋子との恋愛をも説明しうる原因になるのである。同様に父が自分の代で血を絶やすつもりだったという原因は要吉の陸軍の志望のみならず、その後の情死未遂をも説明可能なものとする。

ただし、ここでは意図的か否かは別として、解釈の装置の性質に差もみられる。伯父と通じている母の姿と、隅江とお種と通じている要吉の姿は「血」という学問的（科学的）裏付けのある解釈によって結ばれているが、後者すなわち父の代での血の途絶と陸軍志望あるいは、情死未遂との関係は単なる影響関係、もしくは要吉の個人的思いに過ぎない。前者では要吉の解釈から遺伝と環境が人間を決定する要因であるとするゾライズムの影響が見てとれるだろう。金子明雄の言葉を用いるならば、「罪ある状況を普遍化する言説」として「遺伝をめぐる医学的言説」が用いられているのであるが、後者にはそのような普遍化＝一般化を指向する装置が用意されてはい

ない。[5] したがって同じような「遡及話法」でも、その解釈の妥当性の強度には差があるといえよう。

ただし、以上の分析は物語内の出来事の順序と物語言説における順序との間のずれを消去した上でのものである。前半部においては、度々述べてきた要吉の現状は多くの場合物語言説の上では表れていないことに触れねばなるまい。明らかになっているのは要吉の「東京に於ける自分の不行跡な生活」（一の一）や要吉が「才なくして芸術に依頼する者」であることだが、その詳細が明瞭になるのは「六の一」以降である。最初の引用箇所において風土と因果関係を結ぶことになる現在の要吉の詳細もその実態がいかなるものかは物語言説のレベルでは不明瞭だ。また、要吉が文学を志していることやお種との関係、既に朋子に惹かれていることも同様に不明瞭なのである。そのために、「旧時代の職人」と文学を志す要吉とを「芸術に依頼する者」として併置することの作為性や、伯父と通じているお絹の姿が、要吉の現状から遡及的に発見されたことも前半部においては露見しづらい構造になっている。原因となる出来事が先験的なものとして固定されていく行為自体が語りによってぼかされているのである。つまり、要吉が自身の現状からの「遡及話法」を行っていることを見えにくくしているのだ。同時に、このような現状の不明瞭さは因果関係の妥当性そのものを揺さぶるものにもなるはずだ。物語言説に注目する限り、前述したような因果関係はかなりの時間差をおいて成立するものと言わざるを得ない（この小説が新聞連載小説であることを考慮すればなおさらである）。因果関係が示される時点においては、現状に対して原因としての先験的な出来事が過剰に語られることで、要吉の現状を説明可能にするどころか、その説明自体が妥当性を問われるようなものとなっているのだ。

ところが、『煤烟』を閉じた体系としてではなく、隣接する諸々のテクストと関連づけられるものとして捉えると、また異なった様相が現れてくる。『煤烟』をある特定の時点において成立したものと考えるならば、それは当時の情死未遂事件報道、予告などの記述と関連づけていく必要がある。例えば『煤烟』はその予告（明治四十一年十二月一日～三十一日）において森田文学士による「空前の告白」と位置付けられており、したがって、先の語りと要吉の関係も作者森田草平と情死未遂事件の当事者である森田米松（森田文学士）との関係に置き換えることができる。[6] その場合、先に確認した因果関係の妥当性の検討は物語の構造に注目するだけでは不十分であろう。そのとき「旧時代の職人」と血のつながりを持つ「芸術に依頼する」要吉は情死未遂事件の報道で繰り返し登場した森田文学士にほかならない。伯父と通じている母と「同じ血が脈管を通つて」いる要吉はかつて『東京朝日新聞』や『万朝報』で報じられた森田文学士の次のような姿を思い起こさせるだろう。

▲森田文学士の素性　森田米松氏は岐阜の生（うまれ）にて中学校卒業後金沢第四高等学校に入学せり郷里にて其前常子（二十八）と云ふ婦人と契れり金沢を落第して第一高等学校に入たる後も常子との情交は継続し二人の間に亮一（六つ）泰子の男女二児を挙げ女児は昨年死亡せりさて一昨年帝国大学を卒業して文学士となりしが卒業以前より今日に至る迄本郷区丸山福山町四番地素

人下宿伊藤お春方に下宿し居たり（略）下宿中米松氏は許嫁たる常子を郷里の岐阜に置き自己は下宿の娘お光（三十）に情交を通じ居たりしが卒業後手を切りて国元なる妻子を呼び迎へたり（『東京朝日新聞』明治四十一年三月二十六日）

同様の記事は同日の『万朝報』にも見られ、そこでは「帝国最高学府の教育を受け白楊、二十五絃などゝ称して雑誌其他に種々の著作ある文学士の行為としてハ寔に顰蹙すべき行為」として、森田文学士の（今日的な言い方をすれば）女性関係のルーズさが挙げられている。米松のこのような姿は彼が帝国大学卒の文学士であることとともに、事件報道を通じて、イメージ化されていると言えよう。こうした記事の記憶をもとに、『煤烟』を読むならば、そこでは結果に対する原因は必ずしも過剰なものとはいえない。結果として不明瞭だったこと、すなわち森田米松が文学士であることや、妻子の他に下宿の娘と通じていたうえに平塚明子と情死未遂事件を起こしたことは周知の事実だからである。

このことは、必ずしも事件報道の反映としての『煤烟』を意味するものではない。それよりも、結果だけしか存在しなかった事件報道に、「血」という新聞読者にも了解可能な、一般性を有する法則が用いられた原因が提示され、事件を一般的な因果関係で捉えることが可能になるという点で、そこには事件報道との相補的関係が存在しているといえるだろう。事件報道を踏まえて読むことで、「遡及話法」を用いて現状から原因となる出来事を発見する要吉＝創作し、書く森田草平の姿が顕在化する一方で、その原因としての境遇が理解可能な形で説明されることになるのである。

そして、こうした「読者」が『煤烟』を線条的に読むとき、物語言説の上では結果＝現状は不明瞭でも、原因となる出来事とその結果を導く法則が明示されると、それに沿って不明瞭な（既に起こってしまった）結果＝現状を「読者」が埋めていくという事態が起こることは容易に考えられる。物語言説の順序による現状の不明瞭さが「読者」の読むという行為を介在させたときに「読者」による解釈の前景化を引き起こすのである。明瞭な結果が提示されないという物語言説の順序がかえって、「読者」による解釈の余地を与えてしまうのだ。そして、その「読者」の解釈は物語言説によって時間差をおいて追認されていくことになる。「読者」によって解釈された森田文学士の姿は金曜会で外国文学を教える要吉（六の四）によって追認され、下宿の娘（『東京朝日』によればお光）との交際はお種との関係（六の二〜三）によって追認されるのである。

「読者」は単に要吉による出来事の解釈（＝誤読）を読むのではなく、物語言説に先駆けて、出来事の解釈に参入する。「五の五」までの前半部の記述は明子との情死未遂事件、さらには『煤烟』という文学（予告において自ら芸術上の作品と位置付けた）作品を書く森田草平の現状の原因として位置付けられることにもなるであろう。「読者」は要吉と同様に「他所」からの一般的な解釈を行い、要吉や語り手と協調して要吉（＝草平）の現状を確認し、「七宝焼の図案を渡世にして居た」、「旧時代の職人」である伯父と、「芸術に依頼する」要吉（＝森田文学士）の間、あるいは夫の他に伯父とも関係を持つ母と「不行跡な」要吉（＝『顰蹙すべき行為』を行う森田文学士）と

の間の因果関係を作成することになるのである。あるいは「読者」が要吉と同じ解釈装置を用いて事件の当事者森田米松を事件に導いた境遇の作成に参入しているということもできるだろう。したがって、不明瞭な現状は告白小説として読むことによって、その不明瞭さゆえ、語られた内容を補完する「読者」によって、原因と明らかに対応する結果として形成される。こうして前半部の因果関係の妥当性、すなわち要吉（＝草平）の現状説明の妥当性は解釈する要吉や、それを語る語りを補完するかたちで、事件報道によって類型化されたイメージをもとに読む「読者」、より正確に言えばそうした「読者」が読む行為によって作り出される、事件報道によるイメージと『煤煙』というテクストとの相補的関係によって保証されていくのだ。

以上のように、『煤煙』前半部においては要吉の現状の原因を「血」という法則を用いて探し、その上で、結果（＝現状）と原因が転倒した形で因果関係として語られる。しかし、テクスト内部においては現状が不明瞭な状態で因果関係が提示されるために、原因の過剰が生じ、提示された因果関係の妥当性がテクスト自体によって揺るがされかねない。『煤煙』というテクスト内部では、要吉の解釈や語りの説明は、常に『煤煙』というテクストによって問い返されるのだ。しかし、『煤煙』をテクスト外部に開いたとき、不明瞭な現状は「読者」の読む行為によって明瞭な結果として立ち現れ、同時に情死未遂事件報道においては結果しか存在しなかった森田文学士の「不行跡」さに原因が与えられる。ここでは、テクスト内部においても情死未遂事件報道においても明瞭になっていなかった因果関係が、あたかも原因を過去として先験的に存在するかのような形で現れることになるだろう。テクストと情死未遂事件報道との相補的関係において初めて因果関係は明瞭になり、妥当性を得るのだ。それを可能にしているのが「血」という「他所」からの一般性を有する法則であり、この法則に沿って「読者」が作成した因果関係は「六の一」以降の後半部において物語言説によって承認される。「読者」にも承認可能な「他所」から解釈、「血」という法則がテクスト内部で提示されることで、「読者」は要吉や語りと同じように要吉の境遇を理解可能にしてしまう。要吉の解釈や語りによる説明を問い返す要素が『煤煙』から消されてしまうのだ。ここにおいては、要吉の解釈や語りによる説明は単なる個人的な解釈や説明を超えているといえよう。要吉の解釈や語りの説明はわれわれ「読者」と同様な解釈及び説明であり、それを告白小説として位置づける限り、草平自身がわれわれ「読者」と同様な解釈及び説明を行う者として理解される可能性が生じる。テクストと情死未遂事件報道との相補的関係によって要吉（＝草平）の境遇はわれわれ「読者」に理解可能な形で示されるのである。

もちろん、このような（われわれ）「読者」は、情死未遂事件報道の記憶をもとに、連載小説として『煤煙』を読む「読者」に限定される。ここでいう「読者」とは今日『煤煙』（または『煤煙』）を読む読者とは同じではないし、当時の読者を網羅するものでもない。[7] しかし、本稿の主眼はまさに、その限定された「読者」を想定することにこそある。情死未遂事件報道に隣接し、新聞連載小説として存在する『煤煙』、ある特定の時点に限定した〈事件〉として『煤煙』

を捉えることで、テクスト内部の分析や情死未遂事件報道の反映論にとどまらない、「読者」が読むことによる情死未遂事件報道との相補的関係の様態が見えてくるのである。

注

（1）『煤烟』第一巻は明治四十三年二月十五日、第二巻は同年八月二十日、第三巻は大正二年八月三日、第四巻は同年十一月二十四日刊行。改稿については、「嘗て新聞に発表した時よりも更らに推敲を加へた」（『太陽』明治四十三年十一月）、「其の大部分を新に書直した」（『ホトトギス』明治四十三年十一月）などの記事がある。

（2）ポール・ヴェーヌ著　大津真作訳『歴史をどう書くか』一九八二年法政大学出版局）

（3）飯田祐子著『彼らの物語』一九九八年名古屋大学出版会。初出「『煤煙』における誤読行為の歴史的意味――そして、『峠』における誤読行為について――」『日本文学』一九九六年一月

（4）中山昭彦「〝芸術〟の成型――〈美術〉と〈文学〉の場および抱月・花袋・天渓――」『日本近代文学』平成一九九九年十月

（5）金子明雄「『家庭小説』と読むことの帝国――『己が罪』という問題領域」（『メディア・表象・イデオロギー　明治三十年代の文化研究』一九九七年小沢書店所収）

（6）『煤烟』予告については、それ自体が当時の文学認識と関わりつつ読者に対して読解の規範を提示している側面がある。この点については別稿を用意しており、改めて論じることにしたい。

（7）もちろんこうした「読者」の中でも、いかなる立場から読むのか（例えば『煤烟』を芸術として読むのか、それともゴシップ的な興味から読むのか）といった読者自身の周囲のコンテクストの違いや、それにも回収されない逸脱が生じる可能性は大いにある。『煤烟』における読み方の序列の問題についても別稿を用意しており、改めて論じることにしたい。

引用に際して、旧字体は新字体に改めた。仮名づかいは原則として出典に従ったが、変体仮名は改めている。ルビは適宜省略した。

（たしろ　はやと・北海道大学大学院修士課程）